春風秋雨相

江利川毅　県立大理事長

戦後70年を迎えて

「平和の叫び」後世へ

今年の8月15日は戦後70年の節目、わが国の近・現代史を振り返る機会でもある。戦後生まれが総人口の8割を超え、第二次世界大戦を体験、記憶している人が急速に減りつつある。

テレビ・新聞などではさまざまな特集を組み、戦争に至る経緯、敗戦、戦後の混乱からの復興、戦争体験者の声などを取り上げて、戦争による悲惨な体験を引き継ごうと、工夫を凝らした特集を組んでいる。

私は中学・高校の社会・歴史の教科書で、第二次世界大戦は1941年12月8日の真珠湾攻撃から終戦日までと教わってきた。確かに、満州事変や盧溝橋事件も教科書には書かれていたが、第二次世界大戦とは切り離されたものという印象が残っている。

中国では「抗日8年戦争」と盧溝橋事件以降を戦争の期間と捉えている。日本が誤った進路を進み始めたという意味で、8月14日の安倍総理の内閣総理大臣談話では「満州事変、そして国際連盟からの脱退。日本は、次第に、・・・進むべき進路を誤り、戦争への道を進んで行きました」と満州事変以降の歴史を反省している。歴史の捉え方としては総理談話がより包括的総合的な視点に立っている。

■玉音放送

この機会に、「日本のいちばん長い日」（半藤一利著）と「きけわだつみのこえ」（日本戦没学生記念会編）を読んだ。前著は、戦争の終結を巡る多くの関係者の動きを当事者などに取材し証言を集め秘話を聞き出し、45年8月14日正午から15日正午までの史実をできるだけ正確に再現しようとしたものである。戦争を始めることに比べて、戦争を終わらせることはいかに難しいことか。国体護持、本土決戦を主張する軍部。十分な情報もなく非国民と糾弾されることを恐れ、ものを言えない空気。しかし、昭和天皇は大局を見通されて国民と日本国のために歴史的ご聖断をされ、その御心を戴いて鈴木貫太郎総理大臣や阿南惟幾陸軍大臣が難しい役割をしかるべく果たされた。

「・・・抑抑帝国臣民の康寧を図り万邦共栄の楽を偕にするは、皇祖皇宗の遺範にして朕の拳々措かざる所。・・・尚交戦を継続せむか、終に我が民族の滅亡を招来するのみならず、延て人類の文明をも破却すべし。・・・朕は時運の趨く所、堪え難きを堪え忍び難きを忍び、以て万世の為に太平を開かむと欲す。朕は茲に国体を護持し得て、忠良なる爾臣民の赤誠に信倚し、常に爾臣民と共に在り。・・・」。玉音放送の全文をきちんと読んでみるのもよいのではないかと思う。

■総理談話

『きけわだつみのこえ』は両親から勧められていた本である。将来を嘱望される多くの学生が、学徒出陣で戦地に送り出され、理不尽な軍隊生活、回避不可能な死と向き合う魂の叫びを、自由に表現できないような環境の中で書き綴ったものである。戦争によって多くの有為な人材を失ったとつくづく思う。戦争は二度としてはいけない。

14日の総理談話は閣議決定された。内閣法第4条は「内閣がその職権を行うのは、閣議によるものとする」と規定しており、閣議に諮られ内閣の責任で決定されたことになる。21世紀構想懇談会の報告や多くの方々の声に耳を傾けられ、バランスの取れた内容であると思う。一部には「あの戦争には何ら関わりのない、私たちの子や孫、そしてその先の世代の子供たちに、謝罪を続ける宿命を背負わせてはなりません」の部分を取り上げる人もいるが、私はそれに続く「しかし、それでもなお、私たち日本人は世代を超えて、過去の歴史に真正面から向き合わねばなりません。謙虚な気持ちで、過去を受け継ぎ、未来へと引き渡す責任があります」も含め一体として理解すべきだと思う。

■陛下のお言葉

15日の全国戦没者追悼式での天皇陛下のお言葉は、例年のお言葉の内容に加えて「戦争による荒廃」、「平和の存続を切望する国民の意識」、「戦後という、この長い期間における国民の尊い歩み」、「さきの大戦に対する深い反省」を盛り込まれ、平和への強い思いと国民とともにあるお気持ちが強く込められていて、深く心に沁（し）みるものであった。

国民たるわれわれも、歴史に学び、先人の深い思いを引き継ぎ、特に戦争体験を持つさまざまな人々の平和を希求する心の叫びを受け止め、引き継いでいかなければならないと思うのである。

（次回は9月14日付）